

# 懐メロを媒体とした回想法の高齢者への応用と評価

軸丸清子 藤田晶子 尾原喜美子

高知大学医学部看護学科 〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮

Application of a recollection method using old hit songs to the elderly and its evaluation

Kiyoko JIKUMARU, Akiko HUIJITA, Kimiko OHARA

Nursing Course, Medical School, Kochi University  
Kohasu, Oko-cho, Nankoku City, Kochi, 〒783-8505, Japan

## Abstract

We performed a “recollection method using old hit songs”, which spontaneously developed from the needs of the elderly in our psychotherapeutic nursing clinic for about 10 years, in a day service institution for the elderly for 10 months, and performed observation/analysis/assessment in terms of 11 items. The subjects were 1 male who continuously participated in 8 sessions and showed marked changes. After consent was obtained from all members, the sessions were recorded using a video camera and analyzed by 3 co-researchers. Subject A (male) with severe hearing impairment tended to be isolated but acquired a measure to express himself by musical performance, expanded personal relations, and began to voluntarily joined the group.

This study was supported by a grant from the “Fund for Life” in 2003.

Key words: Senior, Psychotherapeutic Nursing, Old hit song, Recollection

## 要 約

我が国は世界一の長寿国となり、高齢者臨床への関心は益々高まりつつある。長寿ということは、ただ単に長生きをするということではなく、一人ひとりが心身ともにより健康で、満足のいく生活ができるということが重要である。そのためには、心身の健康、社会的交流の維持、そして生活へのたくましい意欲を背景にしたサセクセスフル・エイジング (successful-aging: 成功加齢)<sup>1)</sup> という思考も重要であり、次第に社会的支持を得るようになってきた。また、老いるということは、生理的变化として身体・心理・社会的機能が衰退し、ある種の喪失体験を積み重ねていくことでもある。そのため高齢者臨床では、「いかに生きるか」、「いかに病と共に生きるか」、「いかに死ぬか」という人の生き方の原点に立ち戻った哲学的、心理学的な思考に基づく援助が重要である。

本研究は、研究者の10年余りの精神療法的な看護臨床の中で、高齢者のニーズから自然発生的に生まれてきた『懐メロを媒体とした回想法』を、高齢者通所施設(宅老所)で10ヶ月に渡り実施し、11の視点で観察・分析・評価したものである。対象者は、連続して8セッション参加し、且つ目覚ましい変化が観られた人の中の1名(A氏:男性)である。研究方法は、メンバー全員に許可を得てセッションをビデオカメラに収録し、共同研究者3名で分析・検討した。高度の難聴であるA氏は孤立しがちであったが、楽器を演奏することで自己を表現する手段を得て人間関係が広がり、グループに主体的に参加するようになった。そのプロセスを報告し、高齢者臨床に寄与することを目的とする。

なお、本研究は2003年「生命(いのち)の基金」の助成を受けて実施した。

キーワード：高齢者・精神療法的な看護・懐メロ・回想

### 1. 研究目的

本研究の目的は、研究者の10年余りの精神療法的な看護臨床の中で、高齢者のニーズから自然発生的に生まれてきた懐メロを歌い、それに伴って思い出されることを話すという『懐メロを媒体とした回想法』を高齢者通所施設(宅老所)に応用した結果を、映像と会話のデータから11の視点で評価することである。

### 2. 研究方法

#### 1) 研究デザイン

本研究は、質的研究で、記述的研究デザインとした。

#### 2) 対象

対象は、自治体認可の民間高齢者通所施設(宅老所)に通う高齢者A氏(93歳)、男性である。当高齢者通所施設は、平成13年5月に開所し、常時15~20名(62歳~93歳)が通所している。そのうち今回のセッションに最初から連続して8回参加し、かつ顕著な変化

が観られた者を研究の対象とした。なお、セッションは合計11回であったが、1回は研究者のスーパーバイザー（人間科学部教授）と大学音楽学科の講師2人（助教授、講師）との合同セッションであったので、筆者が実施したのは、10回である。そのうち、最後の2回は、A氏が家庭の事情で欠席したので、第8回までのセッションを研究の対象とした。

### 3) 方法

#### (1) セッションの方法

セッションは平成15年6月から平成16年3月まで、2週間に1回毎土曜日に実施した。時間は13時～14時の1時間であるが、15分程超過することもあった。媒体にした懐メロは、研究者がこれまでに高齢者のグループ療法<sup>2)</sup>を実施してきた経験の中で、高齢者たちがよく好んだ曲を歌集（70曲）にした。セッションでは、その中から自分が歌いたい歌、またみんなと一緒に歌いたい歌を選んで、カード（9.5cm×6.5cm）に歌の題名と自分の名前を書いてもらった。それを回収してシャッフルして裏返し、上から順に「さて、次はどなたの曲でしょう！」と期待を持たせながら曲名と氏名を披露し、歌う曲を決めた。楽器については、グループの輪の中央に集めておいたものの中から、任意に選んでもらった。一曲終わるごとに、その曲を選んだ人に「何か思い出されることや話したいことはおありでしょうか？」と尋ねた。発言が少ない人には、「〇〇さんはこんな事を思い出されたようですが、△△さんはいかがでしょうかね」と開かれた質問で発言を促進した。また否定的、攻撃的な発言が出たときには、肯定的な言い換えをしてフィードバックした。

#### (2) 観察の方法

①参加観察法：筆者と共同研究者の2名で行った。

②モニタリング：ビデオカメラ2台でセッションの最初から最後まで撮影した。一台は、グループ全体が画面に入る位置（援助者の左斜め後ろ）にカメラを設置した。残りの一台は、歌唱の場面では、メンバー全員の表情が捉えられる位置（援助者の右斜め後ろ）から共同研究者がカメラをゆっくりと移動し、個人の表情がなるべく平等にとらえられるよう撮影した。会話の場面では、発言者やそれに対する反応があった人を撮った。

記録については、セッション終了後研究室に戻り、共同研究者でセッションの様子について、全体と個人に分けて検討し、その内容を記録した。内容は、1)参加人数、2)参加者名、3)天気、4)グループの席順と移動のプロセス、5)特記事項：特に顕著な反応やできごと、6)観察者名。個人の様子は、7)会話や行動、服装、化粧、座った席など特に印象に残ったこと、8)次回への課題である。記録用紙は、野村(2000)<sup>3)</sup>のグループ記録表（RGGフォーム）と個人別継続記録（RGIS-Sフォーム）を参考にした。

#### (3) データの分析方法

第1セッションから第8セッションまで、個人の反応および発言場面を捉えたテープ

をコンピュータ編集機能で個人別に繋ぎ（テープ2本）、共同研究者3人に配布した。分析は個人と集団の両方の視点に分けて実施した。個人については、「個人の座席」、「服装・身だしなみ」、「リクエスト（自選）曲」、「選んだ楽器」、「音楽での表現」、「参加ぶり（身振り手振り・言葉・表情）」という視点で分析した。集団については、「集団から個人への働きかけ」、「個人から集団への働きかけ」、「援助者の対象者への関わりとそれへの反応」という視点で分析した。個人の視点から観た分析ができた時点で持ち寄り、ビデオテープの全体像と照らし合わせながら、共同研究者3人の分析の一致をみるまで、「個人」、「集団と個人」という視点から検討した。

#### （4）倫理的配慮

ビデオ撮影及びそれを研究に使用することについては、参加者に説明し同意を得た。

### 4）結果

A氏は、耳元でゆっくり大きな声で話しても、十分に伝わらない程の高度の難聴を有している。自分から積極的に集団の中に入って行くことはなく、食事や集団での何かの取り組みが無い限り、廊下の隅の椅子に座り、一人で外を眺めている事が多い。そこは彼の指定席になっており、他の人が座ることはない。

#### （1）個人としての視点から

##### <座席（図1-1～1-8）>

第2回目（図1-2）以外は、どのセッションでもグループの輪の端、援助者の左右どちらかに座る。A氏を取り巻くメンバーは、第1、2回目は固定しないが、第3回目以降、第6回目まではmm氏が横に座る。しかし、第7、8回目は異なる。援助者は、難聴であることを配慮して、適宜その時々課題やその場で話し合われていることを耳元で端的に伝えることを心がけた。またmm氏は、特に積極的にA氏に関わるわけではないが、例えばA氏が歌集の頁がわからなくて戸惑っている様子をしばらく見てから、横からそっと開いてあげる等の控えめな援助の手を差しのべていた。他の数人のメンバーは、難聴のA氏を気遣って大きな声で代弁をしたり、席を設けて招いたりしていたが、決してそれはA氏の意志を尊重した援助ではなかったように思われる。

Haven(1986)<sup>4)</sup>は、クライアントが『共にいながら自分自身でいられる場所を定める』ためには、クライアントの対人関係パターンに合わせて、対人関係の言葉を用いて『適切な間』を取り、安定した繋がりを作ることが大切であると述べている。A氏にとって、mm氏の程良い距離の取り方、援助者の対人援助的な対応が『適切な間』（心理的距離）として、左右どちらかの援助者に近い席、mm氏の隣という位置になったと思われる。

##### <服装・身だしなみ>（表1）

初回の服装は、下着用シャツに白い綿パンで、今回は明るいブルーのポロシャツに白い

綿パンと、外出を意識した服装に変わったかのように思われたが、その後も第8回目まで、度々下着姿出会った。また散髪なども定期的にしてはいたが、時々寝癖がついたままのときもあった。衣服は体温を調整し、外界から刺激を防ぎ、快適な活動を行っていくために、重要な役割を持っている。また一般に、それを身につけた服装には、その人の生活歴や習慣や人柄による個性的な態度や行動の表現がある。高齢者の場合、認知機能が低下してくると無関心や無配慮などの情意の鈍麻などでそれらができなくなることもあるが<sup>5)</sup>、A氏の場合は、認知機能の低下というより、文化的背景によるものと考えられる。A氏は子どもが成人して家を出た後も、妻が亡くなるまでずっと田舎で農業をして暮らし、身の回りのことができなくなったことを機に、息子の住む比較的まちなかの住宅街に出てきた。田舎では季節（気温）によっては、下着用のシャツを日常着や作業着として活用することもあり、種類は少ないが、毎回変わっていることや季節に応じて選択されていることなどから考えると、認知機能の低下はなく、人前にでることを意識した身だしなみへの配慮ができていたと言える。

#### <リクエスト（自選）曲>（表1）

初回のセッションでは「麦と兵隊」を選び、第5回目のセッションでは「故郷の空」を選んだ。A氏は3歳の時に第一次世界大戦、20歳の時に15年戦争と言われる満州事変、26歳の時に日中戦争、30歳の時に世界第二次大戦を経験し、34歳で終戦を迎えている。

歌詞の内容は、「徐州と徐州と人馬は進む 徐州居よいか住みよいか 洒落た文句に振り返りゃお国訛りのおけさ節 ひげがほほえむ麦唄」と、1938年（昭和13年）の日中戦争で中国の徐州に送られた兵士の母国を想い、傷ついた戦友を労り、励まし合いながら広大な麦畑を進んでいく姿を、力強いリズムで歌った歌である。A氏は3歳から4つもの大きな戦禍を体験している。まさに人生の半分は戦争の時代を生きたとと言える。「この歌から何か思い出されることはないでしょうか？」とたずねたが、頭を縦に振るのみで何も語らなかった。しかし、この歌詞から、戦争で不安定だった時代を、労り励まし合いながら乗り越えて来たのだろうことが推察できた。また第5回目のセッションでは、「故郷の空」を選曲している。この曲は1888年（明治21年）に「明治唱歌」として発表されたスコットランド民謡である。歌詞は、「(1) 夕空晴れて秋風吹き 月影落ちて鈴虫鳴く 思えば遠し故郷の空 ああわが父母いかにおわす (2) 澄みゆく水に秋萩垂れ 玉なす露すすきに満つ 思えば似たり故郷の野辺 ああ、わが兄弟(はらから)たれと遊ぶ」というものである。A氏は唱歌（旧制小学校の教科の一つ）として小学校で習い歌ったものと思われる。この曲について「お婆さん（妻）が死んでから（田舎に）2回帰った（妻がいなくて）寂しい。でも（此处は）皆がいるから寂しくない」と言葉すくなくに語った。援助者は、「A氏はこの曲や歌詞のように美しく、生き生きとした時間を妻と一緒に過ごした故郷を懐かしく思いながらも、寂しいのだろうか」と思いながら聴いた。そして、「この歌のように夕やけや川の水がきれいな田舎だったんでしょうね」と、共感を伝えた。さらに「そんな美しい田舎

で奥さんと辛いことも嬉しいことも一緒に乗り越えて来られたのでしょね」と、様々な苦難があったであろう過去を生き抜いて来たA氏を賞賛した。賞賛は、人間はそれを媒体として自らの愛されたい要求とつながり<sup>4)</sup>、人生はつまらない者ではなく、かけがえのないものであることを見だし、自尊感情を高める<sup>3)</sup>。A氏のように言葉によるコミュニケーションが十分できない対象者の場合、既成の音楽の助けを借りることによって、相手の内的世界の推測が可能になり、過去の様々な体験や現在の心境を共有できるようになる<sup>5)</sup>。そうすることで、はじめて心理的援助が可能になる。

#### <選んだ楽器> (表1)

初回から第3回目までは木魚を選び、第4回目にはジャンベ（脇に抱えたり、脛で挟んで手で叩く底のない太鼓）に一時的に替えてみるが、第5回目には元の木魚に戻った。第6回目からは文化祭への出し物の曲に入っていたので、最初はジャンベを叩いていたが、課題曲である「紅葉」や宅老所のテーマ曲である「タンポポ数え歌」にはあまりにもインパクトが強く他のメンバーから苦情が出た。その結果、元の木魚に持ち替えたが、最終的にはブーンワッシャー（長いプラスチックの筒で「ド」の音）に落ち着いた。手拍子や鈴も試みていたがすぐに辞めてしまう。木魚やジャンベ、ブーンワッシャーは、楽器そのものの音は低い音で、高音領域の聴力が低下する老人性の難聴を持つ人にとっては、聞き取りやすい音域であると考えられる。また楽器を持った手とそれを叩く手の両方でその波動を感じることができる楽器であることから、周囲から聞こえてくるわずかの声やリズム、他者の奏でる楽器の波動を感じとり、そのリズムに合わせて演奏しやすくなるものと考えられる<sup>6)</sup>。そこに言葉を越えた共感性が生まれるものと思われる。

#### <音楽での表現> (表1)

初回は、木魚を勢いよく叩き、みんなとよくリズムが合っている。グループのリズムが身体で感じられているように思われた。第2回目もみんなが歌っている歌のリズムによく合い、音量も大きい。他のメンバーがリクエストした「荒城の月」「芸者ワルツ」では、口をパクパクと動かしてはいるが、歌詞にあった口の動きではなく、声も出ている様子はない。第3回目は、6曲の内「孫」、「2人は若い」は、リズムが合わない。たずねてみると、2曲ともに馴染みがないという。第4回目も、5曲のうち「お富さん」、「おぼろ月」を時々口をパクパクと動かしているが、声は聞こえず、リズムが合わない。第5回目は、全ての曲にリズムが合い、楽しそうに楽器を打っている。第6回目には、皆と一緒に楽器を使っているときはリズムがよく合っているが、1人になると合わない。第7回目は、自ら手拍子にするが、リズムがなかなか取れない。木魚に持ち替える。第8回目は、鈴はリズムが取れずすぐに手放す。ジャンベはバチが弾みすぎてテンポが速くなり、リズムが取りにくく、しばらく叩いているがやがて手放す。援助者がブーンワッシャーを提案すると、最初は頼りなげにいろいろな叩き方を試しているが、すぐにコツをつかんでリズムをつかむ。

A氏は、グループに主体的に参加し、かすかに聞こえる楽器の音やその波動で全体のリズムを感じ取り、自らのリズムを取っているものと思われる。しかし知らない曲になるとリズムが合わなくなる。A氏にとっての身体の奥から湧いてくるリズムは、音や波動のみではなく、身体で感じ取るリズムとその曲に対する（耳が聞こえなくなるまでに聞き、覚えているという）関心が重なり合って生み出されているものと思われる<sup>7)</sup>。また、第5回目はすべての曲にリズムが合い、楽しそうにしている。この回では、A氏がリクエストした「故郷の空」が取り上げられてみんなで歌い、その曲にまつわる話をしている。歌と楽器と語りを通して自己を表現し、みんなと繋がれた感覚を持てたことで、A氏の内的世界が活性化されたものと考え<sup>8)</sup>。

#### <参加ぶり> (表1)

身振り手振り：A氏は初回から演奏し、歌っている時はみんなの動きを見ながら楽器を奏でたり、拍手をしたりしている。「話し」になると、楽器をさわって関心を示さなくなる。第3回目には歌に合わせて頭を振ったり、身体を揺すったりしてリズムを取っている。また援助者の説明にたいしても、言葉での返事ではなく、頷きによって聞いている旨を伝えている。第4回目には始まる前からジャンベを打って楽しんでいる様子が観察されており、はじめてジャンベを使用している。しかし第5回目には、また元の木魚に戻り、持つ場所や叩く位置を変えて、叩き方をいろいろ工夫している。第6回目にはブーンワッシャーを右目に当てて、望遠鏡を覗くようにして援助者を見るなど、ユーモアの一面もみられる。第7回目には、前回のセッションでA氏の楽器の音が大きかったため、「楽器を使わずに歌だけの方がいい」という皆の意見に気遣ってか、楽器を使わず手拍子でリズムを取っているが、不安そうな表情である。前回、援助者がA氏にとっての楽器の意義を説明し、みんなの同意が得られた木魚を勧めると、嬉しそうに何度も叩いて音を確認していた。8日目には、数人のメンバーから「木魚は死人を迎えにくるもの」という意見が出たことに対して、自主的に次々と楽器を取り替えて試し打ちをし、メンバーの意向に応えようとしている。最終的にはブーンワッシャーに落ち着き、みんなも納得した。またこの日はボランティアのピアノ演奏が入り、それに合わせて身体を揺すってリズムを取っている。

言葉：初回は無言のまま木魚を叩いていたが、他のメンバーがリクエストした「青葉茂れる」が終わると、「面白い!」、「嬉しい!」、「朗らかな!朗らかな!」と大きな声で嬉しそうに話した。それに対してメンバーが「ようやりゆう」「普段は会話をすることが少ないので（一緒に演奏できて）よかった」「じっちゃんがこんなに嬉しそうに話したのは初めてや」、「嬉しいんやねえ、良かった、良かった」と、言い合いグループ全体に共感が広がった。また「田舎から出て来て息子と住んでる」と話した。第4回目には、「船頭小唄」を歌い終わるとジャンベを叩きながら「ハハハ!」と大きな声で笑うと他のメンバーも「じっちゃんが笑った」と一緒に笑って喜んだ。「お婆さん（妻）が死んでから（田舎に）2回帰った。（妻がいなくて）寂しい。でも（此処）はみんながいるから寂しくない」と話した。

メンバーは、「良かった良かった、ここに来たらみんながいるきねえ」とA氏を受け入れている。第8回目は、文化祭の発表開会でA氏が遣う楽器をどうするか議論となり、メンバーの一人が（ジャンベを手で打つよう提案すると「(パチでないと)聞こえん!」と、自分の意思をきちんと伝えている。最終的にはブーンワッシャーを使用することで折り合いがつき、A氏、メンバー共に納得した。援助者はA氏の自我を支える意味で、ブーンワッシャーを使ってスタートの合図をするとA氏は声を出して笑った。

表情：初回は声を立てて笑い、また「朗らかじゃ」と話して、みんなの共感が起こった。その後もA氏の言動にみんなの関心が集まり、A氏が発言する度にグループ全体に喜びの声があがった。言葉によるコミュニケーションが難しいA氏は、楽器の中でも特に低音を発する打楽器を奏でることで、長く閉ざされていた孤独な世界が、楽器によって開かれ、みんなの世界と繋がったものとする。

会話によるコミュニケーションが難しいA氏は、場の雰囲気を感じ取り、その課題や場の期待に添うよう努力することでグループに適応していると言える。また「話し」になると、楽器をさわって遊ぶ等、緊張と弛緩がうまくコントロールできていることで、難聴というハンディを持ちながらも、うまくその場に適応できていると言える。

Orff (1974)<sup>6)</sup> は、みんなで作り上げる音楽を味わう中で、多種多様な音のすべてを支えて包み込むような響きが必要であると合意されることは、単調に持続する低音が存在すれば、演奏自体が纏まったものになることを予測できる能力を示すだけでなく、集団が凝集性を証明する動きであると述べている。楽器、特に打楽器のように音と共に身体で波動を感じられるような楽器は、難聴の人にとっては言語の役割を果し、コミュニケーションを促進させる。またそのことによって共感が生まれ、「快」の体験や一体感を共有できる「場」を形成するものとする<sup>9)</sup>。

## (2) 集団としての視点から (表1)

集団から個人への関与：初回のA氏の「朗らかな」という発言に対して、みんなが拍手をしたり、楽器を鳴らして讃える。第2回目には隣人が歌集をめくってあげたり、「ようやりゆう」「普段は会話をすることが少ないので(一緒に演奏できて)よかった」と、口々に大きな声で話し、楽器を鳴らす。第3回目は、「二人は若い」で年齢の話になり、隣席の人が「(年齢のつり合いが) Aさんで丁度よい」と声をかけるが無関心である。周囲の人に指示されるままに動いている。第4回目は、「船頭小唄」を歌い終わりジャンベを叩きながら「ハハハ!」と大きな声で笑うと、皆が一斉に笑う。積極的な関わりはない。第5回目は、隣の ya 氏が体に触れてスタートを教えてあげている。隣の mm 氏が、歌集の頁をめくって次の歌を教えてあげている。第6回目は、最初はみんな楽器を使っていたが途中から「ない方がいい」と、A氏にも楽器を手放すよう強要する。A氏は受け入れて木魚を手放す。第7回目は、A氏のリズムが合わないのを一部のメンバーが非難の目で見ると、しかし ku 氏が「練習したら大丈夫」と励ます。「木魚はポコポコという音が山寺みたい」という意



見、「でもAさんが慣れてる木魚がいいのでは」と、ku氏が庇う。第8回目は、A氏のリズムが合わないのをみんなが非難の目で見ると、一人のメンバーの「木魚はポコポコという音が山寺みたい」という意見に、Ku氏が「でもAさんが慣れてる木魚がいいのでは」と庇う。またはじめて演奏するブーンワッシャーについても、「練習したら大丈夫」と励ます。

個人から集団への関与：初回は、全体を見渡し、リズムを合わせている。他者の「話し」になると、話し手には視線がいかず、笑顔で全体を見ている。第2回目は、曲が変わるとみんなの様子を伺って状況を把握しようと努めている。「話し」には参加できていない。第3回目は、隣人が話しかけてくれることや、皆の話には無関心（聞こえない様子）。第4回目は、ある女性メンバーが楽器を選ぶのに迷っている様子をジッと見ている。「話し」になると視線が泳ぐ。第5回目は、周囲の人を見ながら、自分のリズムを確認している。隣人が次の歌を教えてくれると題を指でなぞって応えている。第6回目は、楽器を使うかどうかの話し合いには無関心である。数人がトーンチャイムで演奏をはじめると視線を向け、注意を向ける。第7回目は、楽器の音が大きいという前回のグループの意見に氣遣って、最初は楽器を持たずに自主的に手拍子を打っている。第8回目は、発表会の席を決めるために、舞台の凶面を広げて議論していると、興味深そうに見ているが、状況が飲み込めると無関心になる。決定すると再び興味深そうにのぞき込む。

援助者の関わりとそれへの反応：初回は、耳元で理解したことを共感的に伝えようとする、言葉は返ってこないが、何度も頷く。第2回目は、耳元で理解したことを共感的に伝えようとする、言葉は返ってこないが、何度も頷く。第3回目は、全体で話していることを耳元で伝えると、頷いている。第4回目は、「今日は木魚から太鼓に変わったんですね」と声をかけると頷く。第5回目は、「この歌から思い出されることは？」と尋ねると、妻と一緒に暮らしていた田舎の話をする。第6回目は、楽器は使わないという意見に対して、援助者が「Aさんにとっては、楽器が皆さんの声と同じようなもの」と説明をした。その結果、楽器を使うことに反対していたメンバーにも賛意が得られ、A氏は再び木魚を嬉しそうに演奏する。第7回目は、A氏を排除しようとするグループの力動とそれを庇う一部の力が働いている事に配慮しながら、「このままで大丈夫」と支持する。第8回目は、木魚によいイメージを持っていない人もいる旨を説明すると了解し、他の楽器を選ぶことを提案し、最終的にブーンワッシャーに落ち着く。

Klages (1944)<sup>7)</sup> は、未開人が踊りながら戦争に出かけたり、踊りながら合唱の歌の調子に合わせて労働しているところに注目し、生活全般が持続的リズムで振動していることを発見した。そして、リズムが魂のリズム振動を強め、拍子が魂とならんで、かつ魂とともに存続しつづけて、そのうえ、絶えず魂と渾全一体となって形成されると仮定している。

A氏は、木魚やジャンベ、ブーンワッシャー等のように楽器から発せられる音と共に、それを持つ手から伝わってくる波動、他者の奏でる音楽を音として、且つ波動として身体で感じ、Klagesが仮定するように、こころ（魂）と身体のリズムが共鳴し合い、一体感として感じられていたのではないかと考える。また他のグループメンバーもA氏の力強い低

音の響きを受け入れ、グループ全体のリズムを形成していたのではないかと考える。このような個のリズムと集団のリズムの協調は、毎日宅老所に主体的に参加するリズムを生み出し、活力のある健康な生活を形成するのではないかと考える。

一方、野村(2000)は、回想法について「人生をふり返る際にやり残している課題に圧倒されるのではなく、今までの生き方に根付きながらその人生を統合させていくことを促す」また回想法は、「困難な状況の多い現実から一步距離を置き、過去が栄光であったことを肯定し、さらに美化して、現在に適応しようとする」<sup>3)</sup>と述べている。同じ時代を生きた者同士が懐メロを媒体として思いでを語り、共感を分かち合うことは、自他を共に受け入れ、葛藤を解決し、自らのあり方に意味を見出し、さらに過去と現在を統合する機能をより促進させると言える。

### おわりに

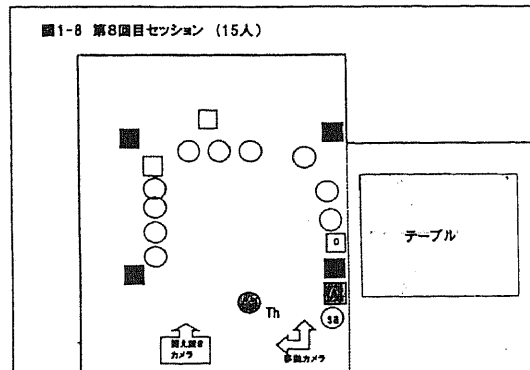
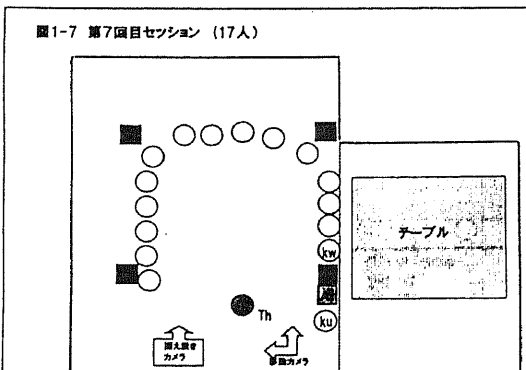
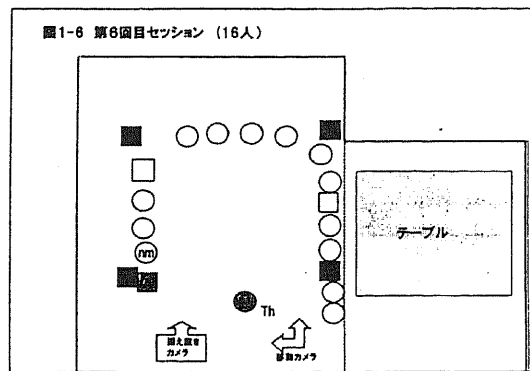
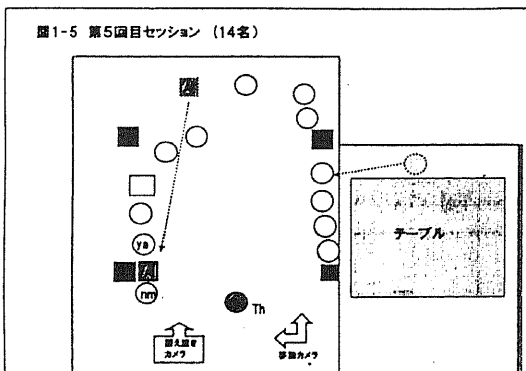
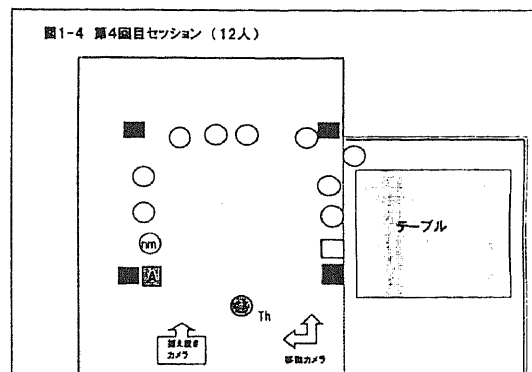
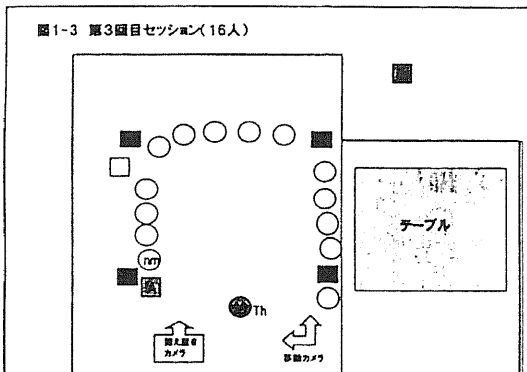
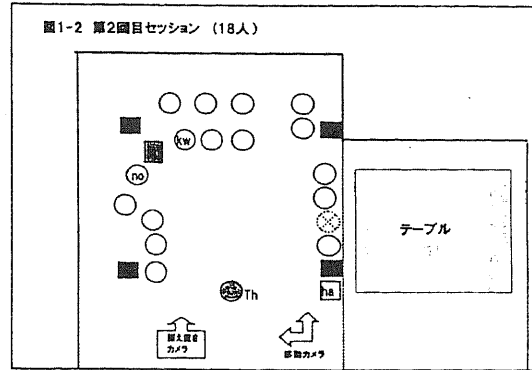
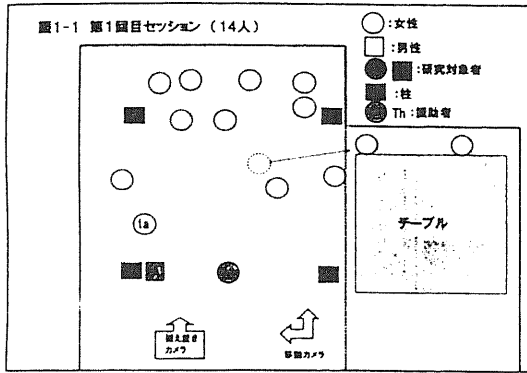
本研究は、懐メロ(楽器)を媒体とした回想法をグループに応用したものであるが、集団の凝集性は、同調傾向を強め集団規範にとらわれる結果、かえって反対に機能を硬直されることにもなる。集団からの逸脱行動は、その行動を起こした個人に対して圧力を加えることになり、反乱分子、村八分の制裁を加えるような状況に陥ることもある<sup>9)</sup>。

回想法のような治療的要素を持ったグループセッションを運営する援助者には、グループの発展過程<sup>9)</sup>として先に述べたようなネガティブな感情が生じてくることを念頭に置き、中立定なポジションで、その力動を適切に処理できる揚力が求められる。そのためには、援助者がグループダイナミクスに精通していることはもちろんのこと、援助者自身が自己の感情に開かれ自己覚知できていることが必要である。そうすることではじめて、グループの発展過程で起こってくるネガティブな感情を含む力動を敏感に感じ取り、適切に対応できる用になる。

### 参考・引用文献

- 1) 道場信孝, 2002, 米国における老年医療の現状, 医学書院, 週刊医学会新聞,
- 2) 軸丸清子, 2002, 息子を亡くした高齢者の「語り」を中心としたグループ療法と個人面接による喪の作業のプロセス, 日本人間性心理学会論文集
- 3) 野村豊子, 2002, 回想法とライフレビュー, 中央法規, 東京
- 4) Leston Havens, 1986, MAKING CONTACT Uses of Language in psychotherapy, 下山晴彦 訳, 2001, 心理療法における言葉の使い方, 誠心書房, 東京
- 5) 室伏君士, 2000, 痴呆患者への対応と介護, 金剛出版, 東京
- 6) 稲田雅美, 2003, ミュージックセラピィー対話のエチュード, ミネルヴァ書房, 京都
- 7) Ludwig Klages, 1944, VOM WESEN DES RHYTHMUS, 杉浦実 訳, 1999, リズムの本質, みすず書房, 東京
- 8) 平山正実・斎藤由紀雄 編, 1998, 現代のエスプリー悲しみへの援助, SHIBUNDO, 東京
- 9) 平野肇, 1995, 対人関係の基礎知識, 日本看護協会出版会, 東京

平成 18 年 2 月 10 日受理



(事例1) A氏(93歳) 男性 通所歴 2年 特記事項: 高度の難聴

分析の観点	セッション1	セッション2	セッション3	セッション4	セッション5	セッション6	セッション7	セッション8
座席(椅子)	左手前: 右は端、左は中央左: 右noと左kwの間	中央左: noと左kwの間	左手前: 右は端、左は下着ジャツツ、白い綿パン	左手前: 右は端、左は下着ジャツツ、白い綿パン	左手前2人目: 右mm、左ya	左手前: 右は端、左mmの間	右手前2人目: 右は端、左はkwの間	右手前2人目: 右は柱を挟んで0、左は加の間
服装(身だしなみ)	下着ジャツツ、白い綿パン	ブルーのポロジャツツ、白い綿パン	下着ジャツツ、白い綿パン、頭髮の乱れ	下着ジャツツ、白い綿パン	ブルーのポロジャツツ、白い綿パン	ブルーの長袖ポロジャツツ、白い綿パン	先通と全く同じ	下着ジャツツ、茶色のジャーゼスボン、首にタオルを巻いている
リクエスト(自選)曲	妻と兵隊				故郷の空	文化祭参加曲(紅葉・タンポポ)	文化祭参加曲(紅葉・タンポポ)	文化祭参加曲(紅葉・タンポポ)
選んだ楽器	木魚	木魚	木魚	ジャンベ	木魚	ジャンベ→木魚→手拍子	手拍子→木魚	ジャンベ→木魚→手拍子
音楽での表現	リズムが合い、音量大	リズムが合い、音量大、荒城の月「芸者ワルツ」では、口を動かしているが声は確認できない。	6曲の内「孫」は、2人は若いではリズムが合わない。後者は馴染みがないという。ジャンベをバチで強く叩いている。	5曲のうち「お富さん」は、「おぼろ月」ではリズムが合わない。時々口をパクパクと動かしているが、声は聞こえない。	全ての曲にリズムが合っていない。音量大。	皆と一緒に楽器を使っているときリズムがよくなる。1人になると合わない。	自ら手拍子をするが、リズムがなかなか取れない。木魚にすると取れる。	録音リズムが取れずすぐに手放す。ジャンベはバチが弾んで、テンポが速くなる。ブーンワッシャーは、最初は頼りなげにしているが、すぐにコツをつかんでリズムに乗る。
身振り手振り	首の動きを見ながら拍手を打っている。	「話し」になると楽器をさわって遊んでいる。ジャンベを打って遊んでいるが使わない。	リズムに合わせて頭を振ったり、援助者の説明に頷いたりする。	始まる前からジャンベを小さく叩いて遊んでいる。頭、身体を揺らす。リズムを取っている。	木魚を持つ場所を替えながら、叩き方をいろいろ工夫している。	ブーンワッシャーを右目に当てて、望遠鏡を覗くようにして援助者を見、関心を引こうとする。	前回の音の意見に氣遣って打っているが不安な様子。手拍子から木魚に替えると何度も叩いて言葉を確かめている。	「木魚は死人を迎えにくる物」という意見に、次々と楽器を替えて試す。ジャンベは、ピアの伴奏に合わせて身体でリズムを取っている。
参加ぶり	初めは無言、後半「青葉茂れる」の曲からは満面の笑みを浮かべ、笑顔が多くなる。	発言なし。	顔が発言はない。	「船頭小唄」を歌い終わるとジャンベを叩きながら「ハハハ」と大きな声で笑う。	「お富さん(妻)」が死んでから(田舎に)2回帰った(妻がいなくて)寂しい。でも(此処)は皆がいるから寂しくない。	「タンポポ数え歌」に合わせて口を動かしているが、声は聞こえない。	メンバーからの歌を知っているのかと尋ねられて、「知らなかった」と応えている。	終始口を動かしているが、声は聞こえない。ジャンベを手で打つよう提案すると「バチでない」と聞くと「バチ、ブーンワッシャーでスタートの合図をする」と声を出して笑う。
表情		終始無表情。	表情が軟らかい。歌の女性役を分けると笑う。	「お富さん」芸者ワルツ」では終始笑顔。	笑顔が少ないが、表情は軟らかい。	笑顔が少ないが、表情は軟らかい。	笑顔が見られないが、表情は軟らかい。	歌っている間は真剣な顔で表情が引き締まっている。歌い終わると笑顔になる。楽しそう。
集団→個人	「朗らかな」という発言に於いて、皆が拍手を打ったり、楽器を鳴らしてたたえる。	個人が歌を歌うと、皆が拍手を打ったり、楽器を鳴らしてたたえる。	「二人は若い」で年齢の話になり、隣席の人が「年齢のつり合いがAさんと丁度よい」と言うが無関心。周囲の人に指示されるままに動いている。	「船頭小唄」を歌い終わるとジャンベを叩きながら「ハハハ」と大きな声で笑う。皆が一斉に笑う。積極的な関わりはない。	隣のya氏が体に触れてスタートを教えてあげている。隣のmm氏が、歌の首をめぐって次の歌を教えてあげている。	最初は皆楽器を使っていたが途中から「ない方がいいた」と、A氏が楽器を手放すよう促す。A氏は受け入れて木魚を手放す。	A氏のリズムが合わないのを避ける目で見ると、A氏が「嫌いな大丈夫」と同席する。「木魚はボロボロ山寺みだり」といって意図的に「でもAさんが慣れた木魚がいいのでは」とA氏が低く。	席を移動するとき、隣席の人が手を添えてサポートしている。「木魚はお迎えが来た(死んだ)ときに送るもの、早く来い(死ね)」と言っている。とA氏が木魚を使うことを避ける。
個人→集団	全体を見渡し、リズムを合わせている。他者の「話し」になると、話し手には視線がいかず、笑顔で全体を見ている。	曲が変わるとみんなの顔を向かって挨拶を飛ばす。話し手には参加できていない(難聴)。	隣人が話しかけてくれることや、皆の話には無関心(聞こえない様子)。	ある女性メンバーが楽器を運ぶのに迷っている様子を見つけて「話し」になると嬉しくなる。	周囲の人を見ながら、自分のリズムを確認している。隣人が次の歌を教えてくれると顔を指でなぞって応えている。	楽器を使わないという全体の意見に、A氏は歌う代わりに楽器で演奏する。木魚で再び演奏する。	前回のグループの意見に氣遣って、最初は楽器を持たず自主的に手拍子を行っている。	木魚によりイメージを持っていない人いるを説明すると了解する。他の楽器から選ぶことを提案すると、最終的にブーンワッシャーに落ち着く。
援助者のかかわりとそれへの反応	耳元で理解したことを共感的に伝えようとするが、言葉は返ってこないか、何度も頷く。	援助者が話し始める。視線が援助者に向く。援助者の姿を目で追って、期待される次の行動を起している。	全体で話していることを耳元で伝えると、頷いている。	「今日は木魚から木鼓に変わったのでね」と声を掛けると頷く。	「この歌か思い出されることがある」と声を掛けると、妻と一緒に話している田舎の話をしている。			